ひかりのこ　愛をもって互いに仕えなさい。　1987年3月1日　第11号

光の子

発行／社会福祉法人光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480－72－3883
振替　東京3－128022
印刷　（株）ドモン企画

春よこい

主のあわれみは朝ごとに新しい

理事長　福島　勲

今わたしの朝は、目覚めると寝ながらにして戸を開け、まず黎科山（二五三〇m）を眺める。

この元旦は曇っていたが、山容はくっきりと見えた。頂上には雪がかかり、濃い紫色を帯びた山々を見下ろして悠然として聳え、ご機嫌の様相を呈していた。

高い山で見る朝の陽のさわやかさは、一日を祝福するかのようにまた一年の幸いを約束するかのようで、人々が好んで日の出を眺める気持ちがわかる気がする。

夜は淋しいものである。夜は不安をまし、どこかで悪魔がせせら笑って、だれかに不幸をもたらせようと企んでいるようだ。

試みに歌謡曲の歌詞をみれば、夜は涙や悲しみや、苦しみや、不安に満ちるといった歌のいかに多いことか。

神や自然を讃美するような歌は、夜刑宝の人の心には訴えないのだろうか。昔キリスト者が作ったという「空にさえずる鳥の声・・」といったものは、ジンタと化してしまい、それも今はほとんど聞くことがない。

愛だとか恋だとか、人間の情の乱れやむすぼりが、せつせつと歌われて、夜の陰を濃くしている。

「夜は寝るものだ」　どん底のどこかにあった台詞だ。

夜を楽しみ、夜をたたえる文化などは、正純な文化の凋落のきざしといいたい。

旧約聖書の一日は「夕べとなりまた朝となった」である。暗い夜は明るい朝によって望みがつながれる。打ちひしがれた夜は希望の朝に力づけられ勇気づけられる。

キリストの死からのよみがえりは早朝であった。

伊勢神宮の還宮は、早朝にわとりの鳴声を合図に行列がすすむということを読んだことがある。この鶏の声が何を意味するのかは読み落としたか記憶にない。

聖書では鶏の鳴く前、ペテロが三度もイエスを否んだとある。近ごろ都会ではもちろん、いなかでも鶏の鳴声は聞こえなくなった。

しかし、ここで朝、ペテロの故事を思い起こすが、この罪の指摘こそ、深い反省とキリストの助けを仰ぐ恵みであって、夜の絶望をたちきる謙虚な望みである。

聖書の哀歌三・22～23では、「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい」とある。

夕べには打ち萎れる現実であるが、朝ごとに神のあわれみを新たにさとらされる。

東風無厚薄
隨例到衡門

宋代の真山民という人の新春という詩の最後の二句である。神戸大の一海知義教授の訳によれば、「春風はえこひいきがなく、例年のごとく、この貧乏ずまいにも吹き渡ってくる」という意味である。

東風を神のいつくしみと解してこの詩をわが心境を歌うものとして借用したい。

子どもたちよ

施設長　今関　公雄

子どもは親を選ぶことはできない。もちろん親もまた子どもを選べない。日本で生まれることや、男であり女であることも自分の思いを超えた秘事である。或る人は自分の出生を手放しで喜ぶかも知れないし、ある人は自分の生い立ちを悲しむかも知れない。それにしても、人はそのおかれた現実から出発する以外に道はない。

「子どもたちよ」、君たちは今や光の子どもの家の子どもである。おそらく、その小さな身体で大人や社会の矛盾を背負い、その意味を充分に知ることもなくここへ入所してきたことであろう。

私は、君たちの入所のときに流した涙を決して忘れない。故あって子どもを委託した親御さんたちの流した涙とその心中をも―。養護施設は、このような子どものそして親たちの悲痛な涙と苦悩をしっかりと受けとめ、共有し、共苦するところから出発し、苦悩を超克し、悲しみから喜びへ付与された課題を訓練に変えて、自らの生を感謝へと変容させる任務を社会的に委託されているのである。

子どもたちよ、君たちは今やこの家の掛けがえのない一員である。ひとり一人異なる家庭の事情を負っており、自分の力に余ることもあろうが、既に仲間なのだ。過去の問題は一先ず置いて、今することを為し、これからを拓くことが大切なのである。

君たちは、幾つかの課題を克服しなければならない。自分らしさを失わずによりよく育ち、社会的な自立をめざすことである。そのことが、きっと君たちを魅力的に成長させるだろう。これは、光の子どもの家で育つ君たちに限ったことではないのである。

私たちの責任担当による家庭的養育のネライを説明すると、職員一人が五名以下の子どもを担当し、疑似家族を構成することに意味を持つのである。それは、人間関係の濃度を高めるところにある。そして、安定した生活のなかで真性の家族とともに、血縁のみではつくれない関係を期待するのである。食事を作り、入浴、就寝など、文字通り寝食をともにしてする養育は、君たちの幾つかの課題の克服を＜ともにする＞ことでたすけになるだろう。

光の子どもの家は、どんな小さな者をも、神は等しく愛の中に入れて掛け替えのない者として下さった故に、皆神の家族であると考えるのである。この世の、適者生存・優勝劣敗を基準とする勝ち残り競争を私たちは生き方の基準とはしないのである。

養護施設もまた、小さな社会といえよう。ここでは、神の家族として、最も弱く、いと小さき者が最も尊重されるよう配慮したいと願っている。それは、その時はじめて家族全員が大切にされることになるからである。

神の家族としての子どもたちよ、どうか隣人と共感共苦し、育ちあい、神の愛に応える人となれ！

エッセイ　草餅

ながさく　清江（俳人）

それは突然の電話であった。

「車やの寅ですよ。」

といわれても思い出せないほどすっかり年老いた人の声であった。

「ちかごろ毎晩あんたのお父っあんの夢ばっかり見てるだよ。わしもなァ、体が弱っていつまで生きてられるかわからんから、いまのうちにいっぺん会って先生の話をしてぇと思ってよぉ。」

と、寅さんは声を詰まらせながら話しかけてきた。

「そうねえ。丁度四月十日のお父さんの祥月命日には静岡の弟と大石寺へお墓参りにゆく約束になっているから、その帰りにそちらに寄らせてもらいますね。」

と答えて電話を終えた。

それから一ヶ月程過ぎた約束の日はよく晴れて、七分咲きのさくらと富士山が美しかった。

出迎えてくれた寅さんは「山本医院」の名を染め抜いた四十数年も前の法被を着込んで、すっかり白髪になってしまった頭を深々と下げるのであった。

私の記憶に思い浮かんでくる寅さんは、一本気で威勢の良い壮年期の姿でしかない。戦争が次第に烈しさを加えて、車も馬も徴収された後、父の往診は自転車という訳にもゆかず、急遽人力車を購い車夫に頼んだのがこの寅さんであった。

富士山麓の村々への往診路はどこも山坂勝ちの石ころ道だったが一向苦にすることもなく、法被姿に捩じり鉢巻で骨身を惜しまず毎日走る寅さんを見兼ねた父は、手助けに曳かせようと土佐犬と秋田犬の二匹を飼ってやった。「雷」「鉄」の名の二匹の犬は世話をしてくれる寅さんによくなつき、一緒に父の人力車を曳いて走り、「病院の寅さん」はどこに行っても人気者であった。

この日手厚く招じられた寅さんの家は、同じ敷地内の表側に新築した息子夫婦とは別に、小流れに添った昔ながらの納屋のような古家だった。それでも老夫婦には充分そうで、四季の移り変わりに気息を合わせて暮らしている二人の日常が肌身で感じられた。

春炬燵を囲み、肝入りの山うどの初ものに舌鼓を打ちながら姉弟は寅さんの昔話に耳を傾けた。

往診が深夜に及んで帰宅しても車をすっかり拭き上げるまでは寝なかったこと。そのピカピカに光らせた車体に小さな弟が指でラクガキをしたのを本気で一喝してしまい弟は震え上って泣き出したこと。食糧難の頃も先生のおかげでいつも腹一杯飯を食わせてもらったこと。先生はいつもやさしく車屋をかばってくれたことなど、人のやさしさを話すとき寅さんは必ず涙声になってしまった。祖母の声音をまねて

「寅さんはお父さんの手助けをしていただく大事なお人ですよ、我儘をいうのではありません。」

と、何かといってはせがむ私をたしなめた或日の祖母の言葉を繰返しながら目頭を熱くしていた。

そんな私に「嬢ちゃんが花嫁ご寮になんなさるときは寅さんがきっとこのピカピカの車にお乗せしてお送りしますだ」と口癖に言ってくれたものだが、間もなく召集され、父も再度の召集を受けて軍医として出征して行った。私の寅さんへの記憶は日の丸の小旗を振って送ったこの日でぷすんと断たれ、戦後すぐ上京してしまった私にはその後の消息は届かなかった

その寅さん夫婦から昨日宅送便が届いた。その中には

「今年初摘みした草の餅です。これは寅雄とつね子だけの気持ですから息子夫婦には内緒に願います。＜元気ですか？＞とだけハガキで下さればそれで着いたことがわかりますから、ぜひそれだけにして下さい」と添書きがあった。

草餅には富士山麓の早春の風の匂いがあった。私はしみじみと蓬の味を噛みしめながら、親子にも他人にも情の濃かった時代を、ひたすら懐かしむ老夫婦のさみしい一面をかいま見る思いであった。

現場から

育ちゆく子らと7

秋元　光代

お正月の五日、野崎さんにも手伝ってもらって、私の担当している四人の子どもたちと一緒に、子象物語と東映まんがまつりという映画を見に行ってきました。

この日まで、大木姉妹（これまでM姉・Mちゃんと記してきました）は、おじいちゃんとお母さんが暮らしているお家へ帰って、親戚の人たちと＜お山の動物園＞に行ったり、お姉さんの麻子ちゃんは、食事の用意などのお手伝いがよく出来てお母さんにとても誉められたりの、楽しい嬉しいお正月でした。

美江子ちゃんは、田舎のおばあちゃんがつくって送って下さった着物を着て、大好きお母さんに光の子どもの家に来ていただいて五日間も一緒に過ごすことができました。

太郎君は、私と一緒におじいちゃんのお家では、お兄さんと一緒に変身ロボットで遊んでもらいました。おばあちゃんからもお年玉やおみやげをいただきました。帰りがけにお兄さんが、一緒に遊んだ変身ロボットを「太郎、これやるよ」と言って太郎くんに持たせてくれました。お兄さんの優しさに太郎くんも私も胸が熱くなりました。

そんな楽しいお正月をそれぞれ過ごしてこの日にみんながそろいました。

とても楽しみにしていた盛りだくさんの映画でしたが、映画そのものが、ほとんどテレビで人気のまんがでしたので、あまりテレビを見せる習慣のない光の子どもの家の生活なので、子どもたちにはなじみがなく、すぐに楽しめるものではなかったようです。

それでも見ているうちに、私の方が『ドラゴンボール』などにひき込まれ、思わず笑ってしまいます。麻子ちゃんに「何笑ってるの？」と、少し非難するように言われてしまいました。「おかしいでしょう。おかしくない？」「ゼーンゼン！」こんなやりとりが何回か繰り返されました。そのうち麻子ちゃんの妹の満ちゃんが「こわいよーコワイー」とベソをかきだしました。何も予備知識がなくて初めて見るまんが映画は五歳の子どもにとっては恐怖だったようです。はじめのうちはくいいるようにして見ていた太郎君も、いつの間にか気持ちよさそうに眠っています。

結局、映画はあまり楽しめなかったようですが、テレビに溺れていない生活の方があたりまえの感覚であることを再確認しました。

途中、本屋さんに寄って、お年玉でそれぞれ欲しい本を買って、大はしゃぎで帰りました。

さあ、この一年が始まります。麻子姉ちゃんは小学二年生になります。仲良しのお友だちがたくさんできて、お家に連れてこられるようになってネ。勉強も大変になるだろう。あきらめないで頑張ろう。本が大好きな麻子ちゃん、何冊読めるかな？

満ちゃんは年長組になります。お絵描きが大好きで、色彩感覚が豊富になりました。いつもみんなにかわいがられていましたネ。今度は小さい年中組のお友だちを、かわいがって、仲良くしてネ。体は小さいけど、お手伝いできるお姉さんなんだもの。

美江子ちゃんも年長組になります。ピアニカ・硬筆などしなければならないことがいっぱい増えます。今のように泣き虫のままだと大変です。外遊びもたくさんしていろんなことに挑戦しよう！

甘えん坊の太郎君は幼稚園に行きます。たくさんのお友だちと仲良しになって楽しい幼稚園生活になりますように。少し強情な甘えん坊はおしまいにして、元気でやさしいお兄ちゃんになろう！

現場から

光の子らしく6

岩崎　まり子

去年、ピッタリだったズボンがスカートが、つんつるてんだったり、パンツまる見えだったり・・ぷっとふきだしながらも、「ああいつの間にか大きくなったんだなぁ。」と何やら嬉しくなります。

身体だけではありません。

少し前まで、そう、ほんの少し前まで、あんなにまとわりついていた子どもたちが、今、友だち同志の輪の中で、笑いながら、泣きながら遊んでいます。

一人ひとりが、自分たちの世界を持ち、自分の目で、耳で、手足で確かめたがっています。

子どもたちは、私が何をしたということもないのに、むしろ、マイナスのことしかできなかった私を慰めるように、成長していってくれます。

それなのに、彼らの寛容さに甘えてしまっているだけの私の進歩のないこと・・・

より充実した人間を、人間関係を求めている子どもたちと、その要求に応えることのできない自分

いつだって子どもたちは、自分の課題に自分で気付き、その克服法を見い出し、克服し、次なる課題に挑んでいます。

加津子ちゃんだってその一人です。

この事実は、二人が光の子どもの家に来て数ケ月後に、伯母さんからの話で分かったのですが、加津子ちゃんは、この四年間、可愛がられるのが当たり前という環境で育ってきました。それもただ可愛がられるのではなく、兄の匠君とは正反対に、なのです。

そんな加津子ちゃんですから、ここで自分が優遇されず、他の子どもたちが自分と同じような生活をしていることは、非常に不思議なことだったでしょう。きっと不満に思えたと思われます。

はじめの頃の加津子ちゃんは、小さい子どもたちを、まるでおもちゃのように可愛がりました。強引で、その癖へっぴり腰。とにかく、可愛いと思う気持ちの表現がまるで下手というよりは、分からなかったのだと思います。

そんな調子ですから、富貴ちゃんも加津子ちゃんには抱っこされたがりませんでした。

それが、五ヶ月経って・・・

「お母さんごっこやるよ―！」と一声かければ、富貴ちゃんをはじめ、家中の子どもたちが集まるほどの加津子ちゃんになりました。

けれど、ここに至るまでの子どもたちの内面のうめきは、どんなだったでしょう。それを思うときいつも菅原先生に言われている「いい仕事しようよな」という言葉と、＜ また子ども独りに血を流させてしまった ― ＞という結果の板挟みで、もみくちゃになることしかない自分がとても・・。

だから、どうするのか。子どもたちと、せめて一緒に血を流せるようになるには、どうすればいいのだろうか。

私は、自分の課題の克服法がまだよく見えません。子どもたちが持っているようなまっすぐな瞳とまっすぐなエネルギーがあれば、すぐ見い出せるのでしょうか。どうして、私はそうではないのでしょう。

けれど、私は、成長しなければなりません。自分の為に、子どもたちの為に。私が百持っていて、初めて、子どもたちに80与えることができるのです。今の私は、決して謙遜ではなく10も持っていないのです。

この目の前にいる素晴らしい子どもたちに遅れないように、私も一緒に成長していかなければ。

乗り越えて欲しい、境遇を ―
乗り越えて欲しい、親を ―
乗り越えて欲しい、自分を ―
乗り越えて欲しい、今を ―

子どもたちと、そして、自分を含めたまわりのみんなの為に祈りながら歩きます。

採光

街のかたち

池田　祐子

毎日は朝がきて、夜がきて、ただそれだけだ。何も変わらない。

コンクリートジャングルには夜がない。星がない。それが悲しい。星が全て落ちてきて、その星でコンクリートジャングルができたのかもしれない。だから、この腐った街の上にも昔は星が光っていたのだろう。

乾いた風が頬を撫でる頃、うす赤紫色の夕焼けが見える。楚の時間だけ街はやさしくなる。

数十分ごとに大移動が繰り返されるスクランブル交差点の真ん中で、急に叫びたくなった時も、うす赤紫色に変わるとやさしくなれる。

そのうす赤紫色に木々のシルエットが浮かびあがる街角で、死んだように眠る人がいる。傍を仮面をつけた人たちが、みんなみんなみんなみんな目をそらして通りすぎる。足音だけを響かせて・・。

仮面をつけた人たちは、死んだように眠る人の中に自分を見る。そして、恐怖を覚える。

もしかしたら、誰もやさしさなんて持ちえないのかもしれない。この腐った街でさえ、やさしくなれるうす赤紫色の時間でも。

みんな何かにとりつかれたような目をして、うす赤紫色の中を歩いている。何故、歩いているんだ何処へ行くというんだ。そうして腐った街に埋もれていくのか。

〝ヤサシサヲワスレナイデ〟

やさしさは踏躙られてしまうだけだ。たとえ、この腐った街でさえ、やさしくなれるうす赤紫色の時間でも。

〝ギットナニモカモガチガウ。ナニモカモガチガウ〟

おまえは、そう叫んで泪を流すだろう。うす赤紫色の瞳から泪を流すだろう。その泪で死んだように眠る人の頬を濡らしておくれ。仮面をつけた人たちの頬を濡らしておくれ。

すべての人たちが、この腐った街に埋もれてしまう前に。うす赤紫色の時間が終わってしまう前に

やがて、うす赤紫色は、星のない夜に吸い込まれていく。やさしい街は消えた。昨日と同じように。

星のない夜の空には、凍った月だけが浮かんでいる。星が落ちてできたコンクリートジャングルの超高層ビルたちが笑っている。目を光らせて笑っている。凍った月に向かって。仮面をつけた人たちに向かって。凍った月は笑えない仮面をつけた人たちは笑えない。仮面の下は、もはや表情はない。どろどろしているだけだ。

街角で、死んだように眠る人も星のない夜に吸い込まれていく。仮面をつけた人たちは、目をそらさずに見つめる。その人の中に見た自分も一緒に吸い込まれていくから、目をそらさずに見つめる。そして、安堵する。

それから、また歩き始める。凍った月を見ることもなく、超高層ビルたちの笑い声を聞くこともない、ただ、自分の意志のないままに歩き続けていくのだ。そうして崩れていく・・・。

〝ナニモカモガチガウ〟

おまえの叫びも、泪も、この夜に吸い込まれてしまった。

〝ドウスレバイインダ〟

〝イッタイナニガデキル〟

ああ、誰もやさしさなんて持ちえない。この腐った街では、崩れていくのを待つだけなのか。

超高層ビルたちは、仮面をつけた人たちが崩れていくのを笑っていたのか。その後で、自分たちも崩れてしまうのか。『自分』さえ存在することなく、みんな崩れるのを待っているのか。

この腐った街でさえ、やさしくなれるうす赤紫色の時間は消え、星のない夜が現われ、空には凍った月だけが浮かんでいる。この街に、星のない夜に向かって、おまえは最後に祈った。すべて許されることを。

――毎日は朝がきて、夜がきて、ただそれだけだ。

何も変わらない――

養護メモ10

かがやきあう

菅原　哲男

養護施設光のこどもの家は、自分にとって利益をもたらすか、どうかによって人の存在のすべてが評価されるこの社会のなかを、利用すべき価値を求めて漂流しつづける家族から、切り離されて、ここに漂着した子どもたちの、ひとり一人が持っている光をそこなわず、大きく育ち輝きあえるようになることとを願って建てられた。

当初から、全体的なルールや行事などをできるだけ少なくしようと考えた。人の生活を日課でくくり、行事にまとめて行動させて、その個性を育み、人として尊重するすべを知らないからである。

普通の家にはない掲示板や放送設備はここにもない。必要な時にその都度顔を合わせ意志を伝達することが人格的な関わりと考える。

子どもたちとの暮らしを始めて二年目が終わろうとしている。

ひとり一人の輝きを大切にしようという私たちの願いや方向に変わりはないが、どうしても全体でする行事が増えている。

昨年の夏には倉海岸と軽井沢へ出かけた。その人の誕生した日にはそれぞれの家でお祝いをしているが、どうしても皆でお祝いしたいというので、毎月誕生会をする。学期のくぎりに評価と反省と目標の確認のための行事をつくってけじめをつけた。

子どもを担当している職員に、他の施設での働きの経験を持つ者は、延べにして三人しかいない。

十五ケ月をかけて定員の九三%に当たる二八名の子どもたちの入所となった。何でも〈初めて〉の試行錯誤の連続であった。

一軒の家に二世帯のグループが暮らしているが、隣の家との関係がセクショナリズムにおちいり易く、等質のとりくみが難しい。

経験者の経験や暮らしの工夫などを伝え、援助しあうことの難しさである。

それでも子どもの数が少ない間は、お互いに行き来することで伝えあうことは少なからずできた。皆が同じことをすればよいというのではない。全く経験を持たないことで、伝統的施設運営では考えられないユニークな関わりもあるのである。そういうものをどう共通の武器にしていけるのかが組織が活性化するカギなのである。

しかし、子どもの数が増えるにしたがって、自分の世帯、家の運営と子どもへのかかわりで精一杯となり、とりこぼしにふりまわされないように気をつけた。

昨年の夏の行事を計画する時、ともかくしなければならないことで、全体でできるものは全体でしようと決心した。そのことで、最低限、子どもにかかわるときに必要な技術、方法、考え方などを皆が経験し、識ることができるだろうと考え、それ以来そうしてきた。

そして、新年度の計画づくりのための反省と評価を一月から始めた。年間行事をつかさどる委員会で、どうしてこんなに全体でする行事が多いのだろう、という議論が起こった。ひとり一人の子どものかがやきは大切にされていたのだろうかと厳しく検討した。

次年度の計画の作成中である。

委員長の丹羽倫己は考えた。

ひとり一人の子どもについて年間個別指導計画が担当職員たちから提出され検討されている。ひとり一人の子どもたちにとって、全体でする行事や、さまざまなことがらも、意味があり、必要であり、真の意味で豊なものでなければならない。たったひとりの子どものために全員が何かをしなければならないときにそれができなければならないし、全員のために何かができるひとり一人でありたい。そんな関係をつくれるような行事を計画したい、と。そして提案した。

この夏は、予算の総額のなかで複数の行事を計画し、担当者と子どもの希望者を募集して、みんながどれかに参加し、その成果を夏の終わりに持ち寄り報告しあう会をするという。行事がひとり一人の子どもたちの光が寄り集まり輝きあう〈まつり〉となり、この家の文化を創る力となれるように。

日誌抄

十二月十六日～二月十五日

十二月十九日　東洋英和女学院中等部より、子どもたちの名前を刺繍した手作りの座蒲団など暖かい贈り物。ありがとう！

十九・二十日　幼稚園クリスマス。歌、お遊戯、劇など楽しかった。

二一日　毎週楽しみに守ってきた四回目のアドベント。ろうそくが四本、クッキーが四つ、ニコラスさんのおはなしも。

二二日　できるだけ多くの子どもたちが家族と一緒にお正月を迎えられるように調整するための家庭訪問をこの日から。家族の負担にならない時間を考えて、昼となく夜となく・・。

二四日　クリスマス・イブ。初めてのキャンドル・サービス。学童の聖書朗読、職員の讃美歌の独唱・合唱がろうそくの灯にゆれて・・ステキな思い出に。皆が眠ったあと、第四アドベントのお話のサンタさんがプレゼントを、ひとり一人に・・。素晴らしい夢を・・。感謝。

二五日　イエスさまの誕生日。お世話になっている近所の方々、幼稚園・学校の先生・お友だちをお招きして、楽しいクリスマス・ページェントとお祝いの会。浦和駅前で街頭募金をしてくれた不動岡高校剣道部のお兄さんたちもかけつけて、暖かく素晴らしい一夜を。お支え下さったすべての人々に感謝を捧げ、私たちよりも不幸な人々に幸いな日の訪れを祈りました。

二八日　もちつき。小雪のちらつくあいにくのお天気を吹き飛ばすように、男子職員がつけば、鎌田さんが、だてに年はとっていないとこねました。見ている子どもも杵にしがみついてヨタヨタ。おなかもいっぱい！

二九日　第八七回職員会議。この年の反省と来る年への身構えなどを話し合い、二度目のお正月を楽しいものにしようと確認。

一九八七年一月一日　初日の出を学童は五時に起きて徒歩、幼児は車で埼玉大橋へ。

九時半より全職員と子どもたちで礼拝。過ぎた年への感謝とこの年の祝福を祈りました。皆でお雑煮をいただき、今年の抱負や決意を語り合い、お年玉をいただきニコニコ。

二～四日　家族のいる家に帰れない子どもたちは、それぞれ担当者とお年玉で買い物、スケートお食事にでかけたり、職員のお家へ連れていってもらったり。とても暖かい楽しいお正月でした。皆さんのご支援のおかげです。心から感謝。

七日　東京電力久喜支店のご招待で小学生がもちつき大会。おみやげも沢山。

十日　青山学院の宗教センターより沢山のジュースを同大学自動車部の人たちが届けて下さる。

十八日　町主催のバレーボール大会に石毛、館山が参加。大活躍

三一日　第九回理事会。補正予算案を審議して承認。

二月八日　ボランティア・グループのアップルクラブが耳の不自由な人々のための聴導犬の贈呈式を園庭で。珍しい聴導犬の演技と説明に子どもたちの真剣な目、目。贈物も。感謝。（くら

反射光

もうすっかり春らくなった日ざしのなかに、子どもたちの駆ける姿が、抜ける歓声が園庭に戻って来ました。私たちが迎える三度目の季節です。これまでのお支え本当に感謝以外の表現がありません☆昨年末の日曜日、ひょこり日本橋の本格的な蕎麦屋さんで有名な納札亭の増田政夫氏が見えられお励ましいただきました。信頼を得られる迄のご苦労と努力と本物の自信とがきらめくようなお話を伺いました。「何でも、本物を求めると、批判者、反体制的になっていく。口先だけのものは消えてなくなる。しかし、本物を見失わず事実を積重ねて努力していると、必ず信頼と評価が返ってくる」このことばと存在の重に圧倒されました。別れ際の握手の温もりが今も☆二度目の年度末を迎え、反省と次年度への展望をづくりに忙殺されています。ひとり一人の子どもの＜かがやき＞を見失わず、更に光度を上げ深めていく働きこそ全職員で追求したいと願います。祈りの援軍を更に！（哲）